

静岡県域における横穴墓群の埋葬原理—群構成・階層性の側面から—

The mortuary principle of the tunnel tombs in *Shizuoka*

—based on the group structure and hierarchy—

林 順

HAYASHI Jun

摘要 : Tunnel tombs were ancient graves excavated into the side of the hill or cliff in the late of the tumulus period (end of the 5th AD. to the end of the 6th AD.) in Japan. They were characterized by their density, and in many cases, they made some groups in certain areas. In addition, by focusing on the group structure and the rank of the burial goods offered in each grave, it will be able to make clear various social relationships of each man who buried in each grave.

This contribution aims to clarify the mortuary principle of the tunnel tombs in *Shizuoka* area. This means how each man was buried while taking account of the relationships in each group who built these tombs, and between groups who built other graves, that is, mounded tombs.

To achieve this object, I analyzed following 2 subjects in this paper: 1) the hierarchy system inside of each groups of the tunnel tombs and 2) the relationships between the tunnel tombs and general mounded tombs which were made nearby them, while focusing on the group structure.

As a result of these analyses, I could find out the excellence of *Totomi* area, especially *Saka* river basin, from the viewpoint of the clearness of the hierarchy inside of the tunnel tombs, and the superiority of them when compared to the mounded tombs. Finally, I assumed that the background of these phenomena links the way of governing system of burial ground (contains both graves) by central policy.

キーワード : 横穴墓群 (tunnel tombs)、群構成 (group structure)、階層性 (hierarchy)

1. はじめに

古墳時代後期 (5 世紀末～6 世紀末) になると、群集墳と呼ばれる小規模古墳が爆発的かつ全国的に築造されるようになることはよく知られているが、この時流の中で出現する横穴墓は同時代の高塚古墳¹と比べ、極めて特異な墓制である。崖面に埋葬施設を掘削するという構造的特殊性はさることながら、九州北部や山陰、東海や関東北部など特定地域に偏在して築造される傾向があることなど、高塚古墳とは異なった様々な特色を指摘できるからである。

1950 年代から本格的に開始された後期古墳研究においては、高塚古墳が主体的に取り扱われる傾向にあり、横穴墓研究は概して低調である (池上 2004: 81)。しかしそうした中でも、その全国的な展開を追った研究 (池上 2000a、花田 1990 など) や、各地域内における横穴墓の玄室の天井形態や平面形態の推移・展開過程を考究した研究 (池上 2000b、松井 2001 など) は、横穴墓の形態面からその推移・展開過程、更には地域色にまで踏み込んでおり注目さ

れる。また近年では、多変量解析と文献史学の成果を融合させて横穴墓築造者の移住を検証した研究（岩橋 2014）など、従来使用されなかった新たな手法を用いた研究も行われている。

しかし、横穴墓は群集して存在する点をその最大の特徴としているにも関わらず²（池上 2004: 80）、各々の地域に即し、横穴墓群の群構成や群内の階層構造の問題について総合的に、かつ詳細に考察した研究は少ない。この視点については、遠江の代表的な横穴墓群である宇刈横穴墓群を分節し、高塚古墳群との構成の比較や各構成単位の位置づけを行った論考（平野・吉岡ほか 1983）を初めとして、各横穴墓群の発掘調査報告書等において個別に論究されてきたに過ぎない。またこのことに関連して、横穴墓と高塚古墳の関係性についても、大正から昭和初期にかけて、横穴墓は高塚古墳より下位の階層の墓だとする見解（望月・手島 1963 など）や、横穴墓被葬者は特定氏族の宗主層で、高塚古墳被葬者は宗主層以外の有力家族だとする見解（金井塚 1975）などが出されているものの、各々の群構成や構成単位を比較した上で検討に及んでいる研究は殆どないと言ってよい。近年では、他と比べて優位な属性を持つ横穴墓が注目されるようになり、例えば大規模な墓室を持ち、飾大刀や金銅装馬具など豊富な副葬品を出土した宇洞ヶ谷横穴墓を有する東遠江では、横穴墓を上位に、横穴式石室を下位に置くような他地域とは異なる独特の階層秩序があったことが指摘されている（大谷 2008: 130, 鈴木 2003: 264-266, 田村 2018: 292）。しかし、議論がそこで閉塞しており、横穴墓群・高塚古墳群各々の内面構造まで踏み込んだ上で考察がなされている訳ではない。

そこで本稿では、横穴墓の分布密度の濃い東海地域の中でも、特に横穴墓が密集する静岡県域を対象として、群構成に焦点を当てつつ、横穴墓群内における階層構造、横穴墓群と高塚古墳群間における階層構造を探る。これらの階層構造は、横穴墓において埋葬行為を行う際に意識された基本原理であると考えられ、この両者を併せ「埋葬原理」と呼称したい。但し、今回後者については、横穴墓群と高塚古墳群が隣接している場合に焦点を絞って検討を行う。そして、そうした階層構造が静岡県域内の各河川流域でいかなる地域性を示すのかを考察する。

2. 群分類・群認定の基準

横穴墓群・高塚古墳群の群分類・群認定に関しては各研究者により独自の名称や基準が定められており、見解が統一されていない。例えば、横穴墓の最小構成単位一つをとっても、水野正好や渡辺康弘は「単位群」と呼称し、同じ枝道に取り付く一連の古墳を指すとした上で、数代に亘る一家族の墓域と位置づけられるとする（水野 1975: 154-155、渡辺 1994: 260）。一方、広瀬和雄は「小支群」と称し、狭溢な空間を占有する 2~3 基の墳墓群を指すとした上で、幾つかの世帯を含んだ血縁関係の強い集団としている（広瀬 1978: 21-22）。更に、群構成の分析については、「いかに分析するかは研究者個人の恣意性に委ねられた状況にある」（池上 2004: 87）との指摘があり、現状では主観の入る余地が多分にあることは明らかである。そこで、完全に主観を排することは不可能であり、今後の研究の発展により基準が変わる可能性があるこ

とを承知の上で、以下のように群分類・群認定の基準を示しておきたい。

本稿では横穴墓群を構成する単位として、「単位群」「小支群」「支群」の3つを設定する。このうち最小単位である「単位群」に関しては「地理的に近接し、開口レベル³や開口方向が揃う傾向にある、1〜3基を基本基数として構成される群」という基準を設ける。単位群は互いの関係が最も濃密な纏まりであると考えられる以上、地理的に近接していることが最も優先されるべき基準となるが、本稿では開口レベルや開口方向といった属性も有効な分類基準として参照する。また、次節でも述べるが、横穴墓の墓

前域には単独墓前域⁴（図1—1、2）と共有墓前域（図1—3）の2種類があることが知られており、各々の築造時期や示す意味は異なっているものの、今回は単独墓前域がある横穴墓が近接して幾つか集まった纏まり、共有墓前域を有する横穴墓の纏まりを双方とも「単位群」として扱う。次に、「小支群」に関しては、「同一丘陵の同じ向きの斜面に展開する単位群が、丘陵の稜線などにより幾つかに分節できる場合の一つ一つの纏まり」と定義する。但し、図2のように横穴墓群によっては有さない場合もあると考える。最後に「支群」に関しては、「横穴墓が同一丘陵でも全く別々の向きの斜面にそれぞれ展開している場合、あるいは近接しつつも全く違う丘陵の斜面に展開している場合」と定義し、これを横穴墓群中最大の単位とする。但し、1基或いは1単位群しか含まない独立型横穴墓群の場合においても、必ず1つの支群に含まれているものとする。

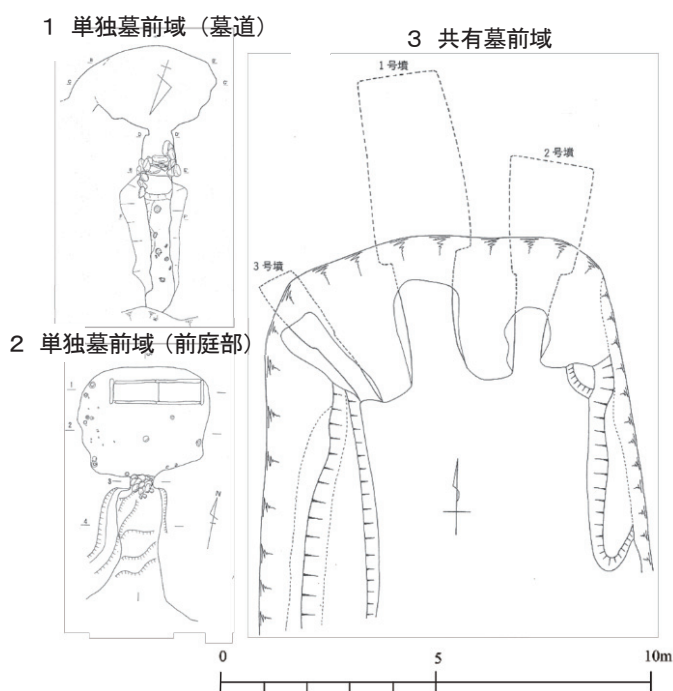


図1 様々な墓前域

1：大寄 A1 号墳、2：大淵ヶ谷 OB-7 号墳、3：谷口 E-1、2、3 号墳

3. 対象遺跡と地域区分・時期区分

今回検討対象とする遺跡は静岡県域全域に及んでおり、未確認あるいは未調査の横穴墓群を除き全体で 77 群 789 基を数える（内訳については表 3 参照）。このうち、遠江地域は 65 群 582 基を、駿河地域は 2 群 49 基を、そして伊豆地域は 10 群 158 基を対象とする。

また、このうち遠江地域については、横穴墓の属する河川流域ごとに、床面構造や埋葬施設などに顕著な差異が見られることが知られているため（井村 2002 など）、今回は河川流域ごとに区分して検討を行った。具体的には、平野吾郎らによる河川流域ごとの区分（平野・吉岡ほ

か1983)に倣いつつ、①太田川中・上流域、宇刈川流域、②原野谷川、逆川流域、③弁財天川流域、④菊川流域、⑤新野川、箴川流域、⑥萩間川流域の6流域を取り扱った(図2・3)。このうち宇刈川は厳密に言うと原野谷川の支流であるが、太田川本流と丘陵などによって画されていない一方、原野谷川本流や逆川とは寧ろ和田岡丘陵によって画されているため、本稿では①に分類した。また、③弁財天川流域については小笠山丘陵の南縁に愛宕山横穴墓群が1群存在しているのみであり、広く見れば太田川流域に含まれうるが、支流から離れて築造されているため今回は別個に検討した。

なお時期区分については、2001年のシンポジウム『東海の横穴墓』(静岡県考古学会2001)を基に、以下のように設定した。すなわち、Ⅰ期(MT15)=6世紀前葉 Ⅱ期(TK10)=6世紀中葉 Ⅲ期(TK43)=6世紀後葉 Ⅳ期(TK209古)=6世紀末葉 Ⅴ期(TK209新~TK217)=7世紀前葉 Ⅵ期(TK46~48)=7世紀後葉 Ⅶ期(MT21)=8世紀初頭とする。

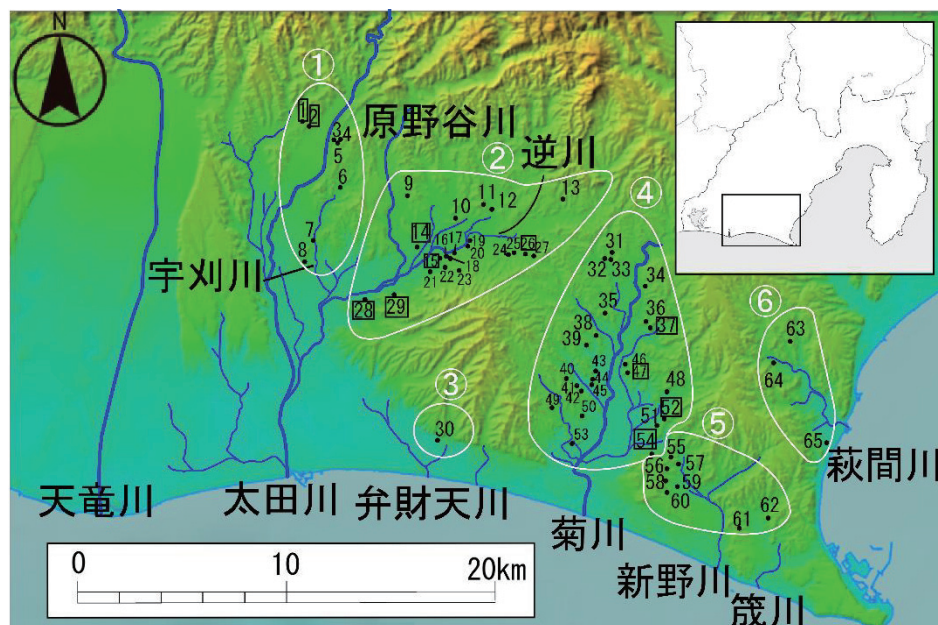


図2 遠江地域の横穴墓群と地域区分

(遺跡番号は表2に対応、□で囲われた数字の横穴墓群は高塚古墳群と隣接している)

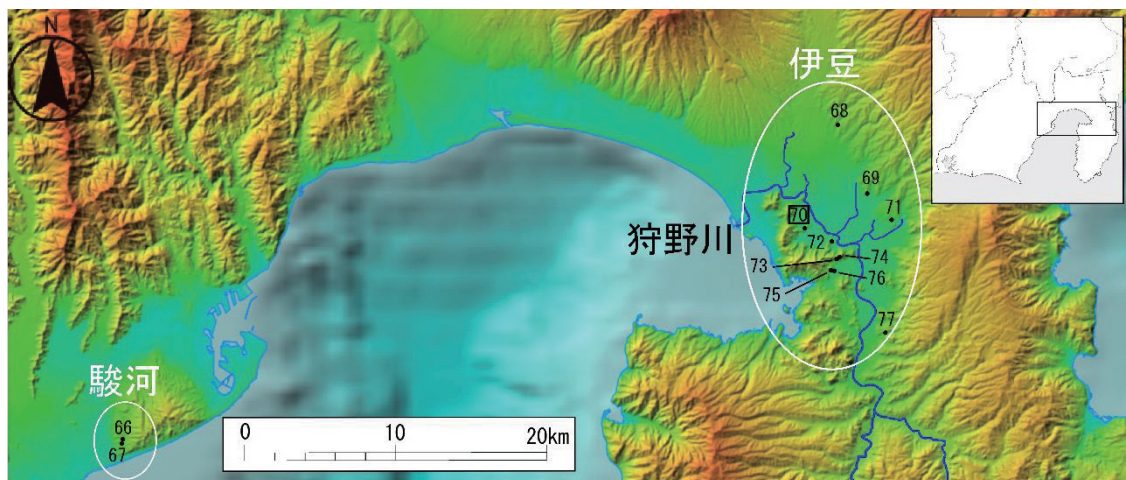


図3 駿河・伊豆地域の横穴墓群と地域区分

4. 横穴墓群内の階層構造

4-1. 階層性を示す属性

本稿では、階層性を示す属性として玄室面積と副葬品の階層性を取り上げ、これらを基軸として階層構造の分析を行う。これらの属性に着目したのは、副葬品の階層性と玄室面積が互いに相関することが指摘されており（大谷 2000 など）、また副葬品の階層性のみで群中の階層差を判別できない場合があるからである。特に伊豆地域の横穴墓は調査時には既に開口しているものが多く、遺物が出土しているもの自体が少ないため、そこから階層性を論じるためには両者の属性を組み合わせる必要がある。また副葬品については、今回はその内容に着目し、基本的には大谷宏治の分類（大谷 2000: 40-41）に依拠して以下の基準を策定している。

階層①：鏡・武具・馬具・装飾付大刀のうち3種類以上を副葬／階層②：①で挙げたもののうち2種類を副葬／階層③：①で挙げたもののうち1種類を副葬／階層④：刀剣類を副葬／階層⑤：鉄鏃・刀子を副葬／階層⑥：土器・玉類を副葬

なお、階層①で挙げた副葬品について、大谷はどれか一つが副葬品として優位であるとは断定できないこと、これらを2種類以上もつ古墳はそれ以下の古墳に比べ格段に規模が大きくなることを述べた上で、これらは「威信財」と認定できるとしている（大谷 2000: 39）。但し、大谷は威信財の語を単に「被葬者の格を示す器物」程度の意味で用いているが、下垣仁志が指摘するように、こうした用語法では器物が授受される脈絡や威信の生成への視点が欠落している（下垣 2010: 107）ため、本稿ではこれらの器物について何らかの位置づけを与えることは控える⁵。また今回の検討では、中世の陶器など明らかに後世に混入したと思われる遺物は除いているが、盗掘の有無は判別が難しいため考慮していないことも附言しておく。

4-2. 群内にみられる時期差

各々の横穴墓の築造時期に差異がみられるか否かという点は、階層構造の分析結果に対する解釈や支群などの各単位の位置づけに多大な影響をもたらすため、横穴墓群内の階層構造を検討する以前にまず考えなければならない問題である。そこで、本項では横穴墓群を構成する最小単位である単位群内において、各々の横穴墓の時期差の有無によって階層差の在り方が異なるのかどうか、先行研究を踏まえて検証していく。

横穴墓群、或いは高塚群集墳中の単位群内の時期差について言及を行った代表的な見解は、池上悟による全国を対象としたものである。池上は単位群内の造営の在り方について、一世代一基の累代的造営が考えられる A 類型と、同時的造営が考えられる B 類型とを想定している。そして、前者は「特定の群集墳を造営した被葬者集団の墓域内における個別家族の相対的自立の傾向」を、後者は「被葬者集団の墓域内における個別家族が自立しない集団的様相」を示しているとし、全国的には A 類型が一般であるとしている（池上 2004: 86-98）。一方、静岡県域における研究としては、西遠江の高塚群集墳を対象とした鈴木一有と、東遠江の横穴墓群を対象とした大谷宏治の論考が挙げられる。このうち鈴木は浜松市三方ヶ原古墳群を対象とし

て、同時代における階層差を内包する高塚古墳群である「瓦屋西タイプ」と、数世代にわたり形成された、明瞭な階層差を見出しにくい高塚古墳群である「半田山タイプ」の2類型を設定し、TK43 型式期に前者から後者の在り方に代わっていくことを述べている（鈴木 2001: 398-401）。つまり、池上氏の類型では瓦屋西タイプがB 類に当たり、半田山タイプがA 類に当たることになる。また大谷は、鈴木ของ考えが東遠江の逆川・原野谷川流域の横穴墓にも適用できるとし、6 世紀後半までは同時期の横穴墓が近接して築造される瓦屋西タイプで横穴墓群が構成されているのに対し、6 世紀末葉になって北部九州から伝播してきた共有墓前域（図 1—3 参照）が遠江地域で出現するようになると、血縁関係を強く意識した、等質的で累代的な単位群の形成が始まるとしている（大谷 2004: 565-567、2008: 134）。

そこで、これらの想定が妥当であるのかの検証を行う。各々の横穴墓の築造年代が分かる横穴墓群のうち、確実に池上の言うA 類型あるいはB 類型と言えるのは計 23 群であり、これらを各々の横穴墓群内における単位群内の階層差、共有墓前域の有無とともに纏めたものが表 1 である。このうち単位群内の階層差の設定方法については後述するが、A～C としたものについてはD、E としたものとは比べ確実に階層差が窺えるとして良い。このことを踏まえると、単位群内の階層差

表 1 横穴墓群の類型と階層差・共有墓前域の関係

遺跡番号	遺跡名	類型	単位群内の階層差	共有墓前域の有無
2	天王々横穴墓群	B 類型	A	○
3	谷口横穴墓群	A 類型	A	○
4	観音堂横穴墓群	B 類型	A	○
5	敷内横穴墓群	B 類型	A	—
8	八幡山横穴墓群	A 類型	A	○
9	土橋横穴墓群	A 類型	A	×
22	大谷代横穴墓群	B 類型	E	○
26	茶屋辻横穴墓群	B 類型	A	○
31	篠ヶ谷横穴墓群	B 類型	A	○
33	西宮浦横穴墓群	B 類型	D	×
36	藤谷横穴墓群	A 類型	E	○
37	宇藤横穴墓群	A 類型	A	×
41	玉体横穴墓群	A 類型	D	○
42	明僧横穴墓群	A 類型	A	○
49	下土方横穴墓群	A 類型	D	×
53	兼情横穴墓群	A 類型	A	—
58	門屋横穴墓群	B 類型	D	○
61	薩田ヶ谷横穴墓群	A 類型	D	○
64	大寄横穴墓群	A 類型	A	×
65	小堤山横穴墓群	B 類型	D	×
67	伊庄谷横穴墓群南谷	A 類型	A	×
69	赤王横穴墓群	B 類型	D	×
73	大北横穴墓群	B 類型	A	×

が確実に窺えるものに限定してみても、A 類型、B 類型双方とも階層差を表出していると言える。すなわち、池上や大谷が想定する「累代的な A 類型＝等質的な築造」という図式は必ずしも成り立つ訳ではないことが明らかであり、この際 A 類型に階層差が生じた原因としては、①単なる薄葬化による場合、②有力な世代があった場合、③家系の構成員が前葬者の階層を超越しない形で自律的に横穴墓を築造し、結果として群内の階層に差異が生じた場合の3 通りが考えられる。しかし副葬品のみに着目した場合、後期でも終末期でもその階層ランクは最上層を除き殆ど変わらないというモデルが提示されていること（大谷 2001: 433）を踏まえると、①ではなく②あるいは③の蓋然性が高いと考えられ、この場合生じた階層差は実際の階層関係を示すことになる。

続いて、共有墓前域について見ていく。共有墓前域の築造が開始された時期について、静岡県全域で統計を取るとⅢ期：2 群（2.5%）、Ⅳ期：17 群（21.5%）、Ⅴ期：35 群（44.3%）、Ⅵ期：18 群（22.8%）、Ⅶ期：7 群（8.9%）となるが、大谷の指摘通り 6 世紀末葉以降になって共有墓前域が多く築造されていることが分かる。しかし表 1 を見る限り、共有墓前域が A 類

型に限定されている訳ではなく、階層差が見られない訳でもないことは明らかであり、6世紀末葉に共有墓前域が用いられるようになると累代的・等質的な単位群の形成が始まるとする大谷の指摘は当たらないと考える。共有墓前域には集団を纏める役割はあっても、それが墓域構成の在り方にまで変革をもたらしたと断ずるのは早計であろう。

以上の検討より、群内における各横穴墓の時期差の有無は、階層構造の分析を行う上での障壁とはなり難いことが確認できた。

4-3. 階層構造の分析

ここでは、前項で述べた内容を前提として、各横穴墓群内における階層構造の分析と比較検討を行う。階層構造の分析に際しては、基軸属性である玄室面積と副葬品の階層性に着目しつつ、横穴墓群を構成する群を第2章の基準に従ってそれぞれ認定し、単位群内、単位群間、小支群間、支群間それぞれの段階において階層差がどのように見られるのかについて考えた。但し、各々の横穴墓あるいはその纏まり（横穴墓群）を比較した際の階層差の現れ方については、以下のような基準を設け、これらを基に評価している。

A 類…より優位な玄室面積・副葬品をもつ横穴墓（群）同士が一つでも関連している場合

B 類…玄室面積に突出したものはないが、副葬品のランクに差異がある場合

C 類…副葬品ランクに差異はないが、突出した規模の玄室面積の横穴墓（群）がある場合⁶

D 類…玄室面積・副葬品それぞれが示す階層的上位の横穴墓（群）が異なっている場合

E 類…玄室面積・副葬品どちらから見ても、突出した横穴墓（群）が見当たらない場合

但し、これらのうちA～C類については、先述した伊豆の副葬品出土の僅少性などの問題点を考えると、現状で優劣を付けるのは避けておきたい。また、D類についても、A～C類に比較すると階層差の表出程度は低いが、現在の資料状況で偶然こうなった可能性も捨てきれないため、階層差を表出していないと断言できるのはE類のみとなる。

更に、横穴墓群の階層構造に影響を与える要素として、その横穴墓群の群集形態も考えられる。今回は、その類型を辰巳和宏による高塚群集墳の3分類（辰巳1983）を基にして以下のように設定し、分析に当たってはこの基準も併せて考慮する。

密集型…極めて限られた地域を墓域とし、少なくとも2単位群以上を集中して築造する型。

散在型…複数の尾根・谷間に跨り、分散的に横穴墓を築造している型。

独立型…1単位群のみで（Ⅰ型）、あるいは1基の横穴墓のみで（Ⅱ型）築造される型。

次に、これらの基準を基に、どのように群内の階層差認定を行うかについて、遠江②（原野谷川・逆川流域）に属する茶屋辻横穴墓群を例にとって見てみよう。茶屋辻横穴墓群は掛川丘陵の北端にある、南北に延びる丘陵の斜面に丘陵頂部を取り囲むように密集して築造されている。2章で述べた基準に基づいてこれらを分節すると、横穴墓が築造される斜面の方向の違いから支群は2つに、墓前域の共有、あるいは開口レベル・開口方向の揃い方から単位群は9つに分節することができる。この横穴墓群の種々の属性を比較した表が表2、玄室面積が5㎡

表2 茶屋辻横穴墓群（遠江②／原野谷川・逆川流域）の各属性

遺跡番号	遺跡名	支群	小支群	単位群	横穴墓・名称	主軸	基本構造					副葬品 階層性	時期
							墓前域	玄室との接続	玄室平面形態	玄室天井形態	玄室面積		
26	茶屋辻	A支群	なし	単位群	A1号	N56° W	単独	両袖	方形	アーチ?	4.4	⑤	V・VI
				単位群	A2号	N66° W	共有	両袖	方形	尖頭アーチ?	3.1	⑤	VI
					A3号	N57° W		無袖	縦長長方形	—	2.2	⑤	
				単位群	A4号	N62° W	単独	両袖	方形	尖頭アーチ	2.5	⑥	Ⅲ・Ⅳ
					A5号	N72° W		両袖	方形	—	5.1	③	
				単位群	A6号	N64° W	共有	両袖平入り	横長長方形	尖頭アーチ	2.1	⑤	V・VI
					A7号	N68° W		両袖	方形	尖頭アーチ	1.9	③	V・VI
					A8号	N76° W		両袖	方形	尖頭ドーム	2.5	⑤	V・VI
				単位群	A9号	N70° W	単独	両袖平入り	縦長橋円形?	アーチ	2.7	⑤	Ⅳ
					A10号	N78° W		両袖	方形?	アーチ	1.6	⑤	Ⅲ・Ⅳ
					A11号	N90° W		両袖	方形	ドーム	5.7	⑤	
				単位群	A12号	N105° W	単独	両袖平入り	横長橋円形	ドーム	1.8	⑤	Ⅲ
					A13号	N116° W	単独	両袖	方形	ドーム	8	④	Ⅲ～Ⅴ
				単位群	A14号	N127° W	単独	両袖	方形	ドーム	3.1	—	Ⅲ
					A15号	N86° W	単独	両袖	縦長橋円形?	ドーム	4.6	⑤	
					A16号	N54° W	単独	両袖	方形?	ドーム	3.7	⑤	
					A17号	N42° W	単独	両袖	方形	ドーム	5.7	④	
		B支群		単位群	B1号	N55° E	単独	両袖	複室構造	ドーム、ドーム	2.9	③多	Ⅱ・Ⅲ

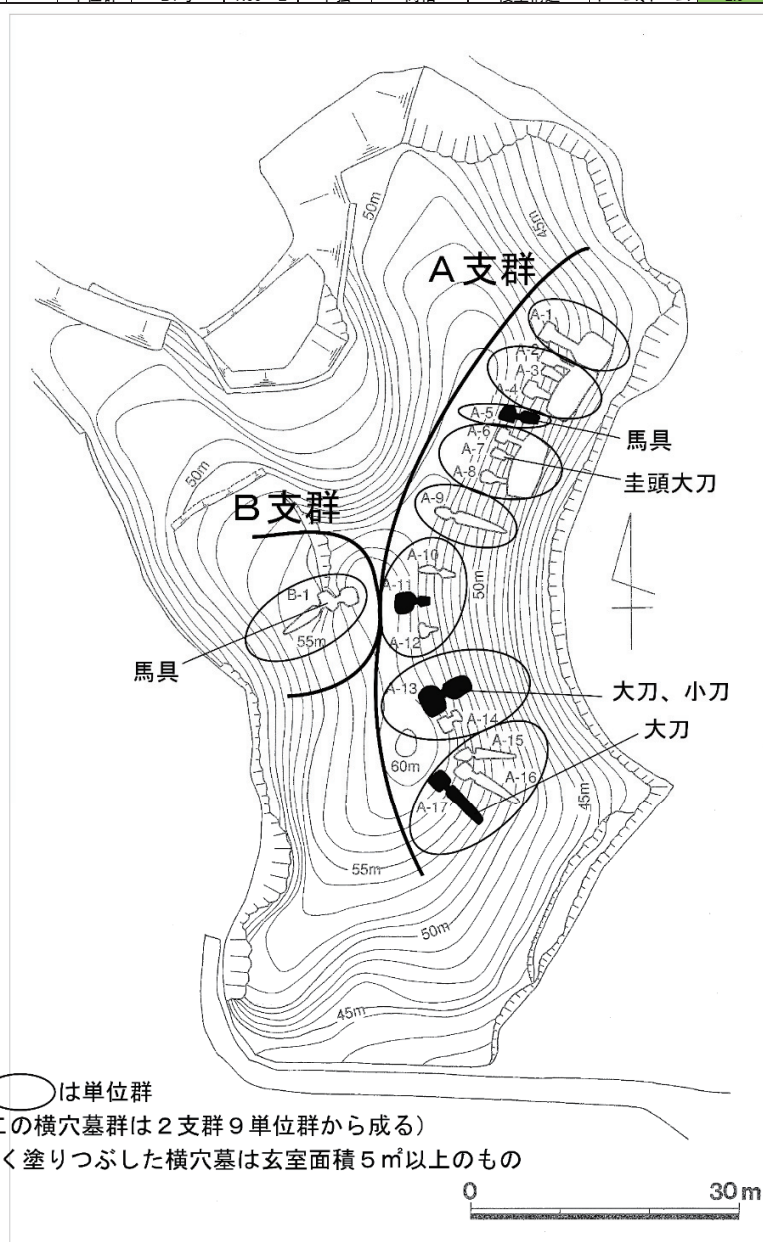


図4 茶屋辻横穴墓群の群構成

表3 各横穴墓群内の階層差分析 (比較対象が無い場合は「—」としている)

遺跡番号	遺跡名	検討基数	支群数	小支群数	単位群数	階層差				辰巳分類
						単位群内	単位群間	小支群間	支群間	
遠江①／太田川中・上流域、宇刈川流域		238	10	11	48	D: 5.9% E: 5.9%				
1	宇藤横穴墓群	13	2	0	7	A	A	—	C	散在
2	天王ヶ谷横穴墓群	55	2	4	19	A	A	C	A	密集
3	谷口横穴墓群	36	1	2	4	A	A	A	—	密集？
4	観音堂横穴墓群	23	1	4	10	A	A	D	—	密集
5	敷内横穴墓群	2	1	0	1	A	—	—	—	独立Ⅰ
6	宇刈横穴墓群	85	1	0	1	—	—	—	—	散在
7	道ヶ谷横穴墓群	9	1	0	3	E	C	—	—	散在
8	八幡山横穴墓群	15	1	1	3	A	—	—	—	散在？
遠江②／原野谷川・逆川流域		316	28	12	87	D: 25.6% E: 5.1%				
9	土橋横穴墓群	8	1	0	5	A	D	—	—	密集
10	三十八坪横穴墓群	44	1	0	2	A	C	—	—	密集？
11	西谷田横穴墓群	5	1	0	1	C	—	—	—	散在
12	原横穴墓群	11	1	0	4	A	A	—	—	密集？
13	大谷(千羽)横穴墓群	35	2	3	14	A	A	A	D	密集
14	岡津横穴墓群	24	2	0	11	A	A	—	D	密集
15	本村横穴墓群	20	3	0	7	D	C	—	D	散在
16	向山横穴墓群	3	1	0	1	A	—	—	—	独立Ⅰ
17	山脇横穴墓群	3	1	0	1	A	—	—	—	独立Ⅰ
18	前山横穴墓群	4	1	0	1	D	—	—	—	独立Ⅰ
19	山麓山横穴墓	1	1	0	1	—	—	—	—	独立Ⅱ
20	宇洞ヶ谷横穴墓	1	1	0	1	—	—	—	—	独立Ⅱ
21	丈山(城山)横穴墓群	1	1	0	1	—	—	—	—	独立Ⅱ
22	大谷代横穴墓群	46	1	0	1	E	—	—	E	密集
23	新田横穴墓群	17	1	1	3	A	B	—	—	密集
24	矢崎横穴墓群	12	1	0	1	D	—	—	—	散在
25	京徳横穴墓群	9	2	0	4	D	A	—	B	密集？
26	茶屋辻横穴墓群	18	2	0	9	A	A	—	C	密集
27	七ツ枝横穴墓群	3	1	0	1	D	—	—	—	独立Ⅰ
28	金山横穴墓群	16	2	3	6	A	A	C	C	散在
29	地藏ヶ谷横穴墓群	35	1	5	12	A	A	D	—	密集
遠江③／弁財天川流域		4	1	0	1	D: 0% E: 0%				
30	愛宕山横穴墓群	4	1	0	1	A	—	—	—	独立Ⅰ
遠江④／菊川流域		465	46	12	94	D: 19.1% E: 12.8%				
31	篠ヶ谷横穴墓群	28	2	3	10	A	A	A	A	密集
32	大淵ヶ谷横穴墓群	38	3	0	12	A	A	—	A	密集
33	西宮浦横穴墓群	2	1	0	1	D	—	—	—	独立Ⅰ
34	下本所横穴墓群	10	2	0	5	A	A	—	E	密集
35	杉森横穴墓群	39	1	2	7	A	A	D	—	散在
36	藤谷横穴墓群	16	1	0	2	E	B	—	—	散在
37	宇藤横穴墓群	24	2	3	10	A	A	C	A	密集
38	東平尾横穴墓群	37	2	0	2	A	—	—	C	散在
39	平尾野添横穴墓群	17	2	0	5	A	C	—	D	密集
40	鳥見ヶ谷横穴墓群	8	2	0	2	A	D	—	—	散在
41	玉体横穴墓群	9	1	0	4	D	A	—	—	散在
42	明僧横穴墓群	14	3	4	4	A	—	D	E	散在
43	松ヶ谷横穴墓	1	1	0	1	—	—	—	—	独立Ⅱ
44	清水ヶ谷横穴墓群	3	1	0	1	D	—	—	—	独立Ⅰ
45	八ツ谷横穴墓群	15	1	0	3	C	C	—	—	散在？
46	大鹿横穴墓群	15	2	0	2	—	—	—	E	散在
47	志味堂横穴墓群	13	2	0	5	A	A	—	C	散在
48	猿渡横穴墓群	3	1	0	1	D	—	—	—	独立Ⅰ
49	下土方青谷横穴墓群	2	1	0	1	D	—	—	—	独立Ⅰ
50	毛森山横穴墓群	137	11	0	11	A	—	—	A	散在
51	池ヶ谷横穴墓群	3	1	0	1	C	—	—	—	独立Ⅰ
52	寺ノ谷横穴墓群	26	1	0	1	E	—	—	—	密集？
53	兼信横穴墓群	4	1	0	2	A	E	—	—	密集？
54	坊ヶ谷横穴墓	1	1	0	1	—	—	—	—	独立Ⅱ
遠江⑤／新野川・成川流域		51	10	5	20	D: 14.3% E: 14.3%				
55	中西(佐栗谷)横穴墓群	9	1	0	1	C	—	—	—	密集
56	中尾殿之谷(神の谷)横穴墓群	7	1	0	2	C	—	—	—	独立Ⅰ
57	山田ヶ谷横穴墓群	4	2	0	2	—	—	—	E	散在
58	門屋横穴墓群	8	2	4	6	D	A	A	A	散在
59	新井平横穴墓群	6	1	1	2	C	E	—	—	密集？
60	南谷横穴墓群	6	1	0	2	A	C	—	—	密集？
61	薩田ヶ谷横穴墓群	6	1	0	4	D	A	—	—	密集？
62	山田横穴墓群	5	1	0	1	A	—	—	—	独立Ⅰ？
遠江⑥／萩間川流域		20	3	3	10	D: 50% E: 0%				
63	蛭ヶ谷横穴墓群	1	1	0	1	—	—	—	—	独立Ⅰ
64	大寄横穴墓群	17	1	3	8	A	D	A	—	密集
65	小堤山横穴墓群	2	1	0	1	D	—	—	—	独立Ⅰ
駿河		49	3	0	14	D: 0% E: 40%				
66	伊庄谷横穴墓群北谷	23	2	0	7	A	E	—	E	密集
67	伊庄谷横穴墓群南谷	26	1	0	7	A	A	—	—	密集
伊豆		158	21	66	0	D: 24% E: 16%				
68	カンカン横穴墓群	2	1	0	1	C	—	—	—	独立Ⅰ
69	赤王横穴墓群	12	2	0	3	D	C	—	D	散在
70	小山横穴墓	1	1	0	1	—	—	—	—	独立Ⅱ
71	柏谷横穴墓群	53	6	8	22	A	A	D	D	密集
72	政戸境横穴墓群	3	1	0	2	E	C	—	—	密集？
73	大北横穴墓群	44	3	6	18	A	A	A	D	密集
74	大北東横穴墓群	12	1	3	7	C	C	C	—	密集
75	割山横穴墓群	20	2	4	6	E	C	C	C	密集
76	大師山横穴墓群	6	1	0	3	C	D	—	—	密集
77	守木横穴墓群	5	1	0	3	F	F	—	—	密集？

以上の横穴墓・階層④以上の副葬品を出土した横穴墓を示した図が図4である。これらの図表に沿って階層差について見て行くと、まず単位群内に関しては、A-13・14号やA-15～17号の単位群内において、より玄室面積の大きい横穴墓に、大刀などのより優位な副葬品が納められている様相が窺え、A類と認定できる。また、単位群間においても、例えばA-10～12号の単位群とA-13・14号の単位群を比較すると、玄室面積でも副葬品でも、後者の単位群が勝っている様相が確認でき、同様にA類と認定できる。但し、支群間を検討すると、玄室面積ではA支群のA-13号がB支群のB-1号⁷より圧倒的に大規模であるが、一方で副葬品についてはA支群とB支群双方で③ランクのものを出土する横穴墓があり（A-5・7号、B-1号）、そのランクに差異が見い出せないため、C類と認定する。以上より、茶屋辻横穴墓群は単位群内、単位群間、小支群間、支群間の順に「A類、A類、—（比較対象が存在しない）、C類」という階層構造を有する横穴墓群であるといえることができる。

以上の分析を静岡県域における各小地域の横穴墓群に亘って実施した結果が表3である。これを見ると、まず遠江①～③・⑥の地域に関しては、D類を含む横穴墓群も見られるものの、概ねA～C類を中心として階層構造が成り立っている。また独立Ⅱ型を除くどの群集形態に関しても、群内に階層差を明瞭に表出している傾向が見られる。更に、特に遠江②の地域では独立Ⅱ型の階層性が卓越しており、逆川上流域に位置する山麓山横穴墓・宇洞ヶ谷横穴墓はまさに「在地有力豪族層の墓」（池上2000b:160）と呼称するに相応しい威容を持っている。

次に、遠江④・⑤の地域について見ると、遠江①～③・⑥の地域よりE類の割合が若干高いように思われるが、E類を含むと評価された横穴墓群の中には山田ヶ谷横穴墓群のように、横穴墓群のごく一部しか調査されず、その蓋然性に疑義が持たれるものも含まれているため、この地域についても独立Ⅱ型を除きどの群集形態でも階層差を明瞭に表出していると言える。

一方、伊豆・駿河地域については、その群集形態の殆どが密集型であり、大北横穴墓群のように階層差を各段階で明瞭に示している例はあるものの、他地域に比べE類の割合が多い傾向がある。例えば、伊庄谷横穴墓群北谷では密集して築造され、副葬品も豊富に出土する23基もの横穴墓を対象としているにも関わらず、階層差を明瞭に表出する状況は窺えなかった。

続いて、以上の分析を踏まえた上で、群集形態ごと、地域ごとに階層構造の在り方について中央政権との関わりという観点から述べていく。まず、群集形態ごとの様相について、遠江地域を中心に見てみると、密集型・散在型については、双方とも階層差を様々な段階において明瞭に表出している傾向が見られた。このうち密集型については、多くの横穴墓がほぼ同時に築造を開始すること、狭溢な立地に押し込めるような形で群を形成していることなどから、従来よりその造営に中央政権による他律的な意図が関わっていることが指摘されてきたが（広瀬1978:22-24、辰巳1983:14-17など）、群内部の階層構造を明瞭に表しているという点で、そこに個人を超えた他律性を読み取ることができること、また階層構造が明瞭であるという点で、散在型についても同様であることが確認できた。更に、独立型についても、Ⅰ型については明

瞭に階層差を表出する傾向が窺え、Ⅱ型でも一部の横穴墓について階層性が卓越しているものが見られた。つまり、中央政権による管理の在り方が群集形態に影響を及ぼすという事実は積極的には見出し得ないことになり、このことは、広瀬の言う「中央政権による墓域の賜与」

(広瀬 1978: 30) がどの類型に対しても行われた蓋然性を高めると考えている。

次に、地域ごとの様相について見ていくと、遠江地域全域、伊豆地域の一部では、総じてどの段階においても階層差を明瞭に表出している傾向があることが分かった。一方で伊豆地域の大部分、駿河地域においては明瞭な階層差が窺えず、計画的な階層構造が横穴墓群に表出されているとは言い難い。しかし、後者の地域においても駿河地域の伊庄谷横穴墓群南谷・北谷から多くの馬具を出土していること、伊豆地域の大師山横穴墓群に畿内・河内地域で盛行したとされる(池上 2000b: 160) 造り付け石棺が設置されていることなどを鑑みると、中央からの直接的、あるいは間接的な影響が見られることは間違いない。但し、墓域や群構成の在り方にまで規制を及ぼしていたとは考え難い。つまり、両者の地域に見られる差は、中央政権による墓域・群構成の在り方に対する規制の程度の差異が生み出したものであろうと考える。

以上より、中央政権による墓域・群構成への規制は、どの群集形態に対しても行われつつも、各地域によりその様相は異なっていたと言えよう。

5. 隣接する横穴墓群・高塚古墳群間の階層構造

本節では、横穴墓群が同地域の高塚古墳群といかなる関係を持って築造されたのかを、「同一丘陵の頂部に高塚古墳群、丘陵斜面に横穴墓群」という形で両者が隣接して築造される事例を基に、特にそれらが示す階層性に着目しつつ述べる。今回は静岡県域全域から各々の内容が明瞭に分かるもののみを取り上げ、表 4・5 に挙げている 12 組を対象としつつ、その群構成と階層性、築造時期について検討する。

まず階層差分析の結果と、両者の副葬品の階層性とを比較した表 4 に基づいて、両者の群構成と階層性について見ると、両者の築造数・単位群数には開きがあり、横穴墓群に近接している高塚古墳群が小規模な傾向にあることが分かる。但し、小規模ながらも階層差は横穴墓群と同様に群内においてそれぞれの段階で明瞭に見られる。

続いて、両者の築造時期の関係について表 5 を基に見てみると、高塚古墳群が築造されたのちに横穴墓群が築造される、というパターンが全てであることが明らかである。このうち横穴墓群は坊ヶ谷横穴墓、小山横穴墓を除き全て 6 世紀中葉か 6 世紀末葉～7 世紀初頭に築造を開始している。一方、高塚古墳群に関しては、5 世紀後半～6 世紀初頭頃に築造されたものが最も多く、ここを築造のピークとして、それ以前に造られたものと以後に造られたものに分けることができる。5 世紀後半～6 世紀初頭にかけて築造された高塚古墳群は、松井一明氏により「Ⅳ類古墳群」と呼称され、当時期における墳丘の規模・墳形の突然変異、有力集落の出現、重層的階層構造を持った高塚古墳群の出現と言った現象を論拠とした上で、畿内政権による政

川が合流する地点より上流域の、逆川右岸・左岸に分布している。また、副葬品の階層性については、これらのセットの殆どにおいて横穴墓が馬具などをもち、貧弱な副葬品しか持たない高塚古墳と比べて高い階層に位置づけられる場合が見られた。例えば、遠江②に属する地蔵ヶ谷横穴墓群・古墳群（図5）においては、丘陵上に高塚古墳群が、丘陵斜面に横穴墓群が築造されているが、高塚古墳群、横穴墓群双方から階層④に属する直刀や鉄剣が出土しているものの、10号横穴墓からは階層③に位置づけうる冠帽が出土しており⁹、横穴墓群は高塚古墳群より一つ上位のランクの被葬者が葬られたとすることができる。こうしたことから、IV類古墳群とその近郊に築造された横穴墓群に対しては、地域をほぼ限定して展開し、概ね横穴墓群の方が高塚古墳群よりも卓越した階層性を帯びる、といった共通性を見出すことができる。

一方で、IV類古墳群以外の高塚古墳群とその近郊に築造された横穴墓群のセットも6組抽出できる（表4・5の1・2、28、37、52、54、70）。これらの立地について見ると、金山横穴墓群・古墳群を除き、全て原野谷川上流域、菊川中流域など逆川流域以外の地域に分散して存在しており、この点で前者とは全く違う様相を見せる。また副葬品の階層差について見ると、高塚古墳群の方が横穴墓群より高い階層にあるパターンが多く、前者とは真逆の様相を呈している。

以上、本節の内容を纏めるならば、横穴墓群も高塚古墳群も群内に明瞭に階層差が見られるが、1つの大きな纏まりとしての高塚古墳群とその近郊にのちに築かれる横穴墓群との関係は、先行して築造された高塚古墳群の所属時期（5世紀後半～6世紀初頭に築かれたか否か）と所属地域（逆川流域か否か）によって規定されていると言うことができよう。つまり、横穴墓群が築造される6世紀中葉～7世紀初頭にかけて、IV類古墳群はより階層性の高い横穴墓群に移るとともに、IV類古墳群以外の高塚古墳群はより階層性の低い横穴墓群へと移り変わるといふ、「墳墓の再編成」とも呼称しうる現象が生じたと考えられる。

こうした現象が生じた背景としては、「中央政権による中央集権体制の強化」が一つの有力な仮説として想定できる。すなわち、6世紀中葉～7世紀初頭頃に静岡県域に波及した横穴墓群をもって、従来の墓制である高塚古墳群によって形成されていた階層構造が刷新され、中央とより深い関係があったと考えられる地域、本稿の場合で言うと逆川流域における人々の階層性がより際立つ階層構造へと構造転換が図られたと解釈するのが妥当であると考え¹⁰。そして、こうした一連の階層構造の転換により、横穴墓群・高塚古墳群間の階層差、ひいてはそうした階層差の地域による違いといった現象が引き起こされたのだと考えている。

第1節において、従来の研究では逆川流域における宇洞ヶ谷横穴墓の存在を基に、横穴墓群が高塚古墳群よりも上位である階層構造が東遠江において復元されていることを述べた。しかし、本節のように、卓越した独立Ⅱ型の横穴墓の存在の評価だけに留まらず、ある程度の時間幅を持ちつつ「墳墓の再編成」という現象を考慮した上で両者の関係を捉え直してみた場合、東遠江内部においても横穴墓群の扱われ方に差異が見い出せると言えよう。

6. おわりに

以上、本稿では、静岡県域における横穴墓群の埋葬原理について、群構成分析を行いつつ、横穴墓群内における階層構造、横穴墓群と高塚古墳群間における階層構造を基に検討してきた。そして前者については、遠江地域には墓群構成上の明瞭さという点で優位性があること、後者については遠江地域の中でもとりわけ逆川流域が横穴墓群の階層性の高い地域であることを導き出した。更に、こうした地域的な差異を生み出した背景には、中央政権による墓域に対する規制の程度が関係していると考察した。

静岡県内において復元できた横穴墓群の階層構造を全国的な視点から位置づけること、また横穴墓群の密集地域から離れた地域に、横穴墓群と同時代に築造された高塚古墳群との関係性を群構成の比較を通じて行うことなどは、今後に残された大きな研究課題と言える。

引用文献

- 池上 悟、2000a、『日本の横穴墓』、雄山閣：東京。
- 池上 悟、2000b、「東海横穴墓の受容と展開」『考古学論究』第7号、pp.154-168、立正大学考古学会：東京。
- 池上 悟、2004、『日本横穴墓の形成と展開』、雄山閣：東京。
- 井村広巳、2002、「遠江における横穴墓の埋葬施設の再検討」『静岡県考古学研究』vol.34、pp.62-72、静岡県考古学会：沼津。
- 岩橋由季、2014、「東北地方における「肥後系」横穴墓の展開とその背景」『日本考古学』第37号、pp.37-56、日本考古学協会：東京。
- 岩松 保、2018、「古墳秩序の中の横穴墓、その分布と意味」『待兼山考古学論集』Ⅲ、大阪大学考古学研究室30周年記念論集、pp.591-604、大阪大学考古学研究室：豊中。
- 遠藤才文・伊藤美鈴、1996、『静岡県森町 飯田の遺跡—葛城ゴルフ倶楽部地内遺跡群調査報告書—』、森町教育委員会：静岡県森町。
- 大熊茂広・前田庄一、2003、『東名掛川I・C周辺土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』、掛川市教育委員会：掛川。
- 大谷宏治、2000、「遠江・駿河における古墳時代後期の階層構造」『静岡県埋蔵文化財調査研究所研究紀要』第7巻、pp.31-55、静岡県埋蔵文化財調査研究所：静岡。
- 大谷宏治、2001、「階層構造論—階層構造からみた東海の後期古墳」『東海の後期古墳を考える』、pp.429-439、東海考古学フォーラム：岡崎。
- 大谷宏治、2004、「遠江における横穴墓研究ノート①—掛川市大谷横穴群の事例から—」『考古学論叢：関西大学考古学研究室開設五拾周年記念』上巻、pp.547-570、関西大学考古学研究室開設五拾周年記念考古学論叢刊行会：吹田。
- 大谷宏治、2008、「遠江の横穴墓からみた家族・社会の変化」『東海の高墳風景』季刊考古学

- 別冊 16、pp.127-135、雄山閣：東京。
- 金井塚良一、1975、『吉見百穴横穴墓群の研究』、校倉書房：東京。
- 静岡県考古学会編、2001、『東海の横穴墓』、静岡県考古学会：沼津。
- 下垣仁志、2010、「威信財論批判序説」『立命館大学考古学論集』V、pp.97-124、立命館大学考古学論集刊行会：京都。
- 鈴木一有、2001、「東海地方における後期古墳の特質」『東海の後期古墳を考える』、pp.383-405、東海考古学フォーラム：岡崎。
- 鈴木一有、2003、「東海東部の横穴式石室にみる地域圏の形成」『静岡県の横穴式石室』、pp.255-266、静岡県考古学会：沼津。
- 辰巳和宏、1983、「密集型群集墳の特質とその背景—後期古墳論（1）—」『古代学研究』第100号、pp.10-18、古代学研究会：池田。
- 田村隆太郎、2018、「6世紀後半における東海東部の地域性と首長墓」『境界の考古学』、pp.283-294、静岡大会実行委員会：静岡。
- 長田実・及川司・大川敬夫ほか、1986、『駿河・伊豆の横穴群（静岡県内横穴群分布調査報告書Ⅱ） 本文編』静岡県文化財調査報告書 第35集、静岡県教育委員会：静岡。
- 花田勝広、1990、「畿内横穴墓の特質」『古文化談叢』第22集、pp.163-193、九州古文化研究会：北九州。
- 平野吾郎・吉岡伸夫・足立順司ほか、1983、『遠江の横穴群 静岡県横穴群分布調査報告書Ⅰ 本文編』、静岡県教育委員会：静岡。
- 広瀬和雄、1978、「群集墳論序説」『古代研究』第15巻、pp.1-42、元興寺仏教民俗資料研究所考古学研究室：奈良。
- 福地吉比古・露崎充・山崎武士ほか、1983、『大淵々谷 篠々谷 西宮浦』明星大学考古学研究部研究報告 第2集、明星大学考古学研究部：東京。
- 松井一明、1994、「遠江・駿河における初期群集墳の成立と展開について」『地域と考古学』向坂鋼二先生還暦記念論集、pp.343-385、向坂鋼二先生還暦記念論集刊行会：浜松。
- 松井一明、2001、「遠江における横穴墓の伝播と展開—北部九州横穴墓との形態と墓前域の比較を中心として—」『静岡県考古学研究』vol.33、pp.19-33、静岡県考古学会：沼津。
- 松井一明編、2004、『地蔵々谷古墳群・横穴群Ⅰ・Ⅱ—袋井の群集墳と横穴群を考える（3）—』袋井市考古資料集 第4集、袋井市教育委員会：袋井。
- 松下善和・小谷亮二・田中久美子、2000、『大寄横穴群・山下遺跡発掘調査報告書』、相良町埋蔵文化財調査研究報告書 第5集、相良町教育委員会：静岡県相良町。
- 水野正好、1975、「群集墳の構造と性格」『古代史発掘』第6号、pp.143-158、講談社：東京。
- 望月董弘・手島四郎編、1963、『駿河伊庄谷横穴墳』、静岡工業高等学校：静岡。
- 渡辺康弘、1994、「群集墳の「単位群」構成について」『地域と考古学』向坂鋼二先生還暦記念

論集、pp.249-261、向坂鋼二先生還暦記念論集刊行会：浜松。

＊本文中で取り上げていない報告書類については割愛させていただきました。

図1 1: 松下・小谷ほか 2000 2: 福地・露崎 1983 3: 遠藤・伊藤 1996 より引用

図4 大熊・前田 2003 の図を改変 図5 松井編 2004 の図を改変 図2・図3・表1～5 筆者作成

- ¹ 高塚古墳は墳丘を有する一般的な古墳を指し、無墳丘の古墳である横穴墓と区別される。
- ² 但し、後述する宇洞ヶ谷横穴墓など、単独で存在するものも一部にある。
- ³ 大谷宏治は、各々の横穴墓の比高差が「0.5m 以下が条件といえ、0.8m 程度までが許容範囲として認められるとしても、1m 以上比高差のあるものは再検討してみる必要がある」（大谷 2004: 561）としているが、適切な指摘であると考えられる。
- ⁴ 単独墓前域は、図1—1のように横穴墓の羨門より前の空間が一本の細い道となっている「墓道」と、図1—2のようにその空間がある程度広がりを持つ「前庭部」とに分類できる。
- ⁵ なお、大谷は2001年の論考において、これらの器物が「威信財」かどうかは別問題として、「ある一定の地位・身分を示す身分標識財（表徴財）である蓋然性が高い」（大谷 2001: 431）として多少考えを改めているが、身分を示すとする根拠がこれらの器物全体に亘って示されている訳ではないため、この語も安易に使うべきではないと考える。
- ⁶ 基準としては、群中で最も小さい玄室面積の、2倍以上の規模を持つものを選定した。
- ⁷ 茶屋辻 B-1 号は九州地方との繋がりが窺える複室構造を成す（大熊・前田 2003: 17）が、ここでの検討では前室と後室の面積を合計したものを「玄室面積」として計上している。
- ⁸ これは大谷が横穴式石室の規模と横穴墓の規模を分けて検討しているように（大谷 2000）、玄室面積の単純な比較により階層差を見出すのは困難であると考えからである。
- ⁹ 冠帽を被ることが許された人々は、群集墳に葬られた古墳時代後期の拠点集落の人々を束ねる領主であったと推測されている（松井編 2004: 105）。
- ¹⁰ 同じく原野谷川流域の高塚古墳、横穴墓を検討した平野吾郎も、6世紀初頭における高塚古墳の衰退とその後の横穴墓の台頭という現象を認め、それがヤマト政権による地方豪族の打倒とミヤケ設置によるものであろうとしている（平野 1980: 380-382）。また、横穴墓の全国的な偏在性に着目した岩松保氏は、横穴墓の分布と記紀に記載された征討軍のルートと国造カバネの分布とが対応関係を示すことを指摘しているが、このことから、国造を設置するという中央の施策を実現するために征討軍が派遣され、国造が配置された地域において新たに生み出された国造直属の集団が横穴墓を築造したと考察している（岩松 2018: 595-603）。このように、この地に横穴墓が台頭した現象については、様々な背景が想定されている。